コハクチョウの嘴峰について

三　上　士　郎（日本白鳥の会顧問）

はじめに

松井会長から，本誌に「コハクチョウ」の嘴峰のお前の分け方を書くよう再三すすめられていたが，会の皆様に今更こんな基本初歩的なことを書くのも失礼と思って延々していた。

然し此の2月28日，北上市で，4月6日福島市で，それぞれ「アメリカコハクチョウ」（以下「アメコ」or W．S）と「コハクチョウ」（以下コハクor Cy．Co）との交雑らしいものが，それぞれ Mary．E．Evans氏等のDarky（三上Ⅰ型：後述）型「コハク」とペアーを組み，そのヒナ2羽を連れて，岩手，福島に現れ，しかも福島では既に昭和60年にも鏡石町の高野沼に2羽のヒナを連れた，同様Darky（Ⅰ型）を相手としたアメコが現われており，又，昨年11月14日には，弘前市近くの廻堰大溜池に，たった1日丈の瞬時で，其処を飛び立ち南下したものだが同様の例があった。しかも此の場合は，その「アメコ」が，相手としてM．E．Evans 氏の Yellowneb（三上Ⅱ型）を選び，同様ヒナ2羽を伴っていたので（写真8及び8′）（弘前市，川口紘氏撮影），私はこれらのヒナ達のF_1，F_2（第一代子孫，第二代子孫）にどんな形の「コハク」の嘴峰が現れて来るかという懸念に襲れた。私は，この先10年もしたら切角M．E．Evansや私（特に私は，昭和40（1965）年から，此の「コハク」の嘴に目を注ぎ，或る時は人様にわらわれ，或時は厳寒の日本各地の渡来地の風雪にさらされ，種々雑多な試行錯誤を繰返しながら，結局は得る所のなかったのだが）が行って来た分類法が烏有に帰すのではないかと思った。そして，これから数十年たってからの白鳥観察者に昔の割に交雑の少なかった時代の「コハク」の嘴はこうであったという事を伝えておくのも，無意味でないと考え直して筆をとった。

今迄の「コハク」の嘴の基本型は後述する通り大体三つに分けられている。

昭和55（1980）年冬札幌で，松井会長の主宰開催された「世界白鳥会議」で，私は私と同じこの「コハク」嘴の研究者である英国の Mary E．Evans 氏（会長マッシューズ氏夫人）と直接お目にかかって（写真⑮），私の所持する色々な「コハク」の嘴峰の写真をおみせし質問した。私の一番聞きたかった点は，此の3基本型(Ⅰ)，(Ⅱ)，(Ⅲ)で，或時は(Ⅰ)と(Ⅱ)が，或時は(Ⅱ)と(Ⅲ)が，或いは(Ⅰ)と(Ⅲ)が交配した場合に，その子孫の「コハク」の嘴がどの様に展開してゆくのだろうかということだった。即ちそこに一定のルールがあるのだろうかという長い間の私の疑問をM．E．Evans氏に問うた。

すると夫人は，例の外人だけに特有の両手を拡げられ，肩をすくめて笑いながらその mixed については，“I don′t know” と答えられたのである。

たったこの3種の組合わせの今後の展開上でも，世界一流の Peter Scohtt門下生さえ分らぬとされることである。ましてや私如きに分ろう筈はないが，然し次の事丈は言い得るであろう。即ち恐らく世界初と思われる今回の日本の「W．S」と「コハク」Darky，Yellowneb（三上Ⅰ，Ⅱ型）との交雑がある以上，繁殖地が重複し属も同じならⅢ型 — Pennyface — との交配も当然あっていい筈であると。

〒035　むつ市柳町1丁目8－16

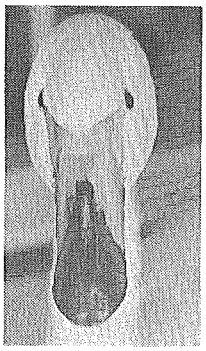
しかもその相手がもとの「W. S」そのもの（頬に黄斑のあるもの，ないもの）或いは，その外想像される各種のType のもののCy，Coとの間にどんな嘴のものが生れて来るか？

蓋し，之は収拾のつかない混乱を生ずるに違いないだろうことは容易に想像される。Cy，Coの嘴のパターンを今の中にかきとめておくことは緊急のことと思うのである。

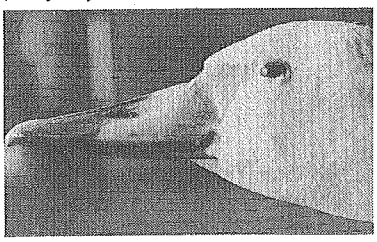
本　　論（I）

そうならない中の「書き置き」としての意味を含めて本論に入る。

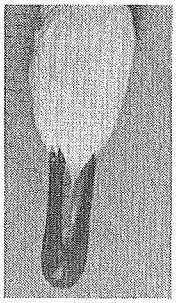
まず「オオハクチョウ」（以下「オオハク」Cy，Cy ）の嘴峰は正面からみての像は御存知の通り，黒→黄→白（鼻孔が黒と黄へ共に跨る）



写真①



横からみて写真②
（鼻孔が黒と黄に跨る）
（のアゲが少い）



写真③裏全黄
（水をのむとき等よく見える重大ポイント）

これはどなたでも知っている所だが，さて「コハク」の私の追求を述べるに当って，玆に私は山岡貞夫氏（横浜市）の名を挙げねばならない。

私が昭和25年当むつ市に居を定めてから，恩師中西悟堂先生はじめ，此の下北半島を訪れてくれた野鳥の同好者は数百名を下らないと思う。特に，私の後半生「コハク」（Cy．Co）の嘴に，文字通り心血を注ぐきっかけを作って呉れた人が，此の山岡氏である。

氏は，昭和39（1964）年12月26日，私宅を訪問された帰り，同行の寺島和光氏と共に小湊に立寄られた。当時は，日本ではCy．Coの渡来数は極めて少く，どこでもせいぜい数羽づつしか来ないとされていた。これは未だ望遠鏡ばかりで，プロミナーもない時代であったから止むを得なかったが，Cy．Cyに比べてCy．Co の数は極端に少いというのが学界の定説であった。

然し，私はその数少いCy．CoとCy．Cy とを何とかして見比べて，その違いを知りたいと熱望していた。

所が，小湊をみて帰られた山岡氏が，東京から「小湊にCy．Coがいた」と言って，その写真まで送ってよこして下さった。

その詳細は「野鳥」誌235号（1966）に記したが，私はその翌々月即ち昭和40（1965）年2月21日，鳥友2名と小湊を訪れた。風の猛烈につよい日で，陸から海へ向けてのそれは佇立さえ許さぬ態のもの

であった。

私はコンクリートの枠の横倒しになったものに軀をかくし，白鳥群を安っぽい望遠鏡（昭和16年，4円50銭で求めたプロミナーの前身）で沖をみると，白鳥は風に流されまいと皆私の方に向って並んでいる。即ち正面像である。そこで私を驚かしたのは，Cy. Cyが正面からみてみな写真①の如き，黒→黄→白であるのに反し，その中の一羽の嘴が写真④の如く嘴尖から頭頂白色部まで，黒一色の個体であっ

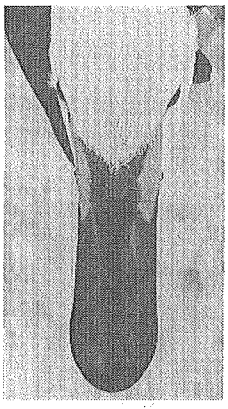


写真 ④

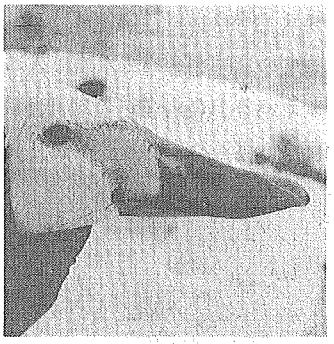


写真 ⑤
（アゲ著）

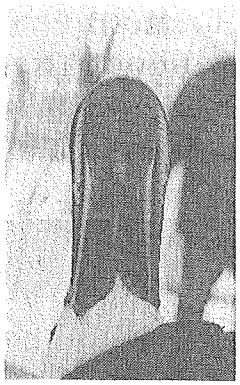


写真 ⑥

た。私は之ぞ正真正銘のCy. Co 也と断じた。又側面像に於て，写真⑤を得，この白鳥が水をのむ時に上げる嘴の裏面⑥からその裏面が全黒或いは，僅かに黄を残すか（場合に依っては稀に，Cy. Cy の裏面の如く全黄を示すものもある事）をつきとめた。

私は今から33年前，これぞCy. Co とまるで鬼の首でも取った様に得意になり，山岡氏の小湊に於ける幼鳥 Cy. Co の御指摘を借りて，野鳥235号（1966）に Cy. Cy と Cy. Co の正面像に依る識別法として発表したものである。地方のマスコミは「三上大発見」として大々的に之を報道した。その上，慚愧に堪えないのは，中西悟堂先生まで之を野鳥誌等で賞讃して下すったのである。

之は，私の大失敗，早やとちりではあったが，私のその後の Cy. Co の嘴峰解明追求の一つの契機になってくれたことでもあった。

所が，此の白鳥への一見いかがわしそうに見える三上式識別法が，たまたま島根県松江市の穴道湖，中海に於て根岸啓二氏，内田映氏，岩田正俊氏等の斯界の錚々たる方々によって，追試される事になり，そこで従来両湖のものが皆 Cy. Cy である，という言い伝えを破ってその殆んどが Cy. Co ではないかという疑念を生ずるに至り，今日その殆んどが Cy. Co と決定されたのである。これは，私の怪俄の功名だったと今でも自慰しているのである。

本　　論（Ⅱ）

所が，その后3年目の昭和43（1968）年8月，私には青天の霹靂のような大事件がもち上った。

私の追試を行っていた島根大教授の岩田氏が，弘前市の学会に来られた折，態々駕を枉げられて拙宅を訪れ，写真①の如く嘴尖から黒→黄→白の Cy. Cy Type のものでも，鼻腔が黒の中に埋っている明

らかな Cy. Co の数葉の写真を示されたのである。（写真⑦しまね野鳥№7「白鳥失敗記」）

私は一度に奈落の底につき落された様なショックを受けた。尤もその前后から日本には可成りの Cy. Co が渡来しているという事は，既に仙台の佐藤和夫氏（1966（昭和41）年 1.，於伊豆沼。全羽117羽の中，Cy. Co 77羽）や高野信二氏（瓢湖）等に指摘されており，私も屢々津軽地方で特に，渡来初期に射殺された数体が皆 Cy. Co であったことから，Cy. Co は案外数が多いものと思っていた。

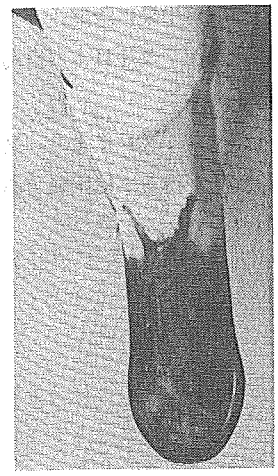


写真　⑦
（詳細「しまね野鳥」№7参照　岩田氏呈示と同型，Ⅱ型）

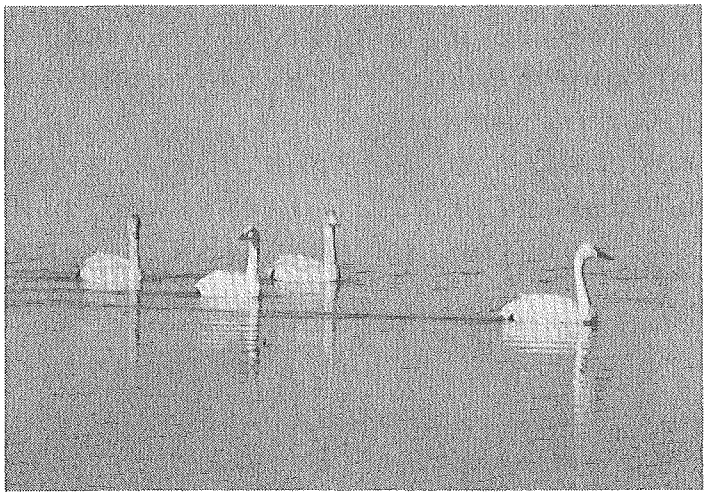
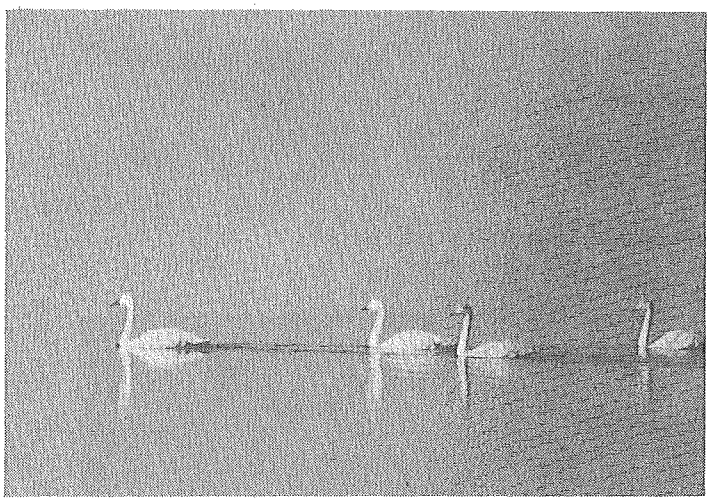


写真　⑧　昭和62年11月14日
於弘前市郊外廻堰大溜池
右端アメコ（W. S）（川口紘氏撮影）
左から二番目 Cy. Co Ⅱ型成（Yellowneb）



写真⑧'　先頭（W. S）　次 Cy. Co(Ⅱ)
（川口紘氏撮影）1987. 11. 14

之に決定的断を下したのが堀内盛一（柳沢）氏であった。氏は昭和42（1967）年10月25日，北海道クッチャロ湖で506羽の渡来全白鳥の総べてがCy．Co であるという新発見をして，斯界を瞠目させたのである。此の若い一青年の業跡は従来の「日本には Cy．Coは僅かしか渡来しない」という，鳥学会の有数な多くの人々に一大鉄槌を下したものとして，長く日本の鳥類学に特筆大書されるべきことであろう。

さて，前記岩田氏の Cy．Cy 型 Cy．Coの存在の示唆は，私にとっては有難く，その後私は当大湊湾に渡りの途中，一時羽を休めた Cy．Coの幼鳥が，トラバサミによって死亡した個体が正しく Cy．Co であることをつきとめ，此の Cy．Cy型 Cy．Coを三上のⅡ型として確認，その后嘴中央に菱形，ダイヤモンド型を有する Cy．Coを発見，之を三上Ⅲ型として発表した。（しまね野鳥№7及「日本の白鳥」№3，№4，1976，1977）

私は之と同時に此の3型の側面像及び困難ではあったが，その裏面像を野外でプロミナーにより，又，斃鳥，傷収容鳥に於て追求し，三上Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ型を区別した。尤も裏面像の総べてを得る事は困難であったが，とにかく之を纒め，本誌「日本の白鳥」№3，№4に一括掲載させていただいた。

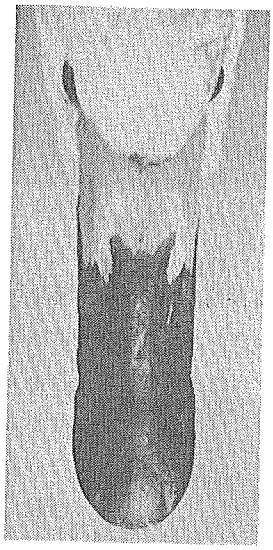


写真 ⑨

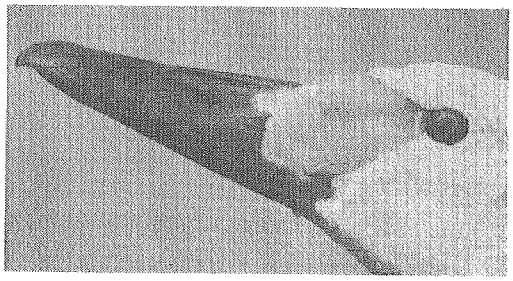


写真 ⑩

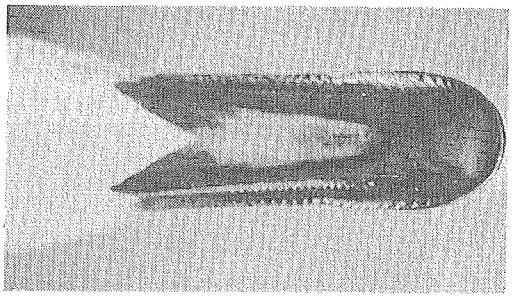


写真 ⑪

←Ⅱ型（原画、しまね野鳥参照）

Ⅲ型→

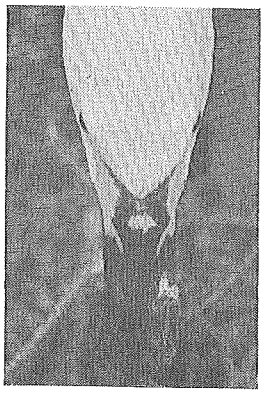


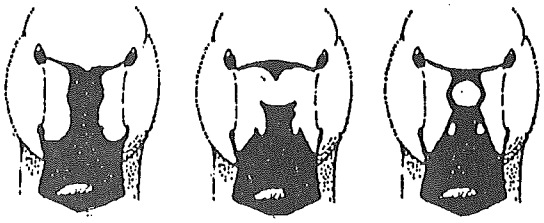
写真 ⑫（ダイヤモンド型）

写真 ⑬ 側面

写真（裏）⑭ 一部黄

私が英誌 Wildfowl 28 を知ったのは，岩田氏指摘のその後７，８年たってからであったと思う。そこにはM．E．Evans氏が次の図を掲げて，Cy．Co についての一論文を示していた。之がはしな

Mary.E.Evans　Darky　Yellowneb　Pennyface　(1977) Wildfowl28より



三上　士郎 (Shiro.Mikami)　三上Ⅰ型 (1965,2~1971,2~1977,4) 野鳥235 号　三上Ⅱ型 しまね野鳥NO·7　三上Ⅲ型(ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ 型) 日本の白鳥 NO·3 NO·4

図 ①

くも，三上Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ型であったのだが，私は上記の３基本型がいつ，誰によって発表されたかは迂濶にして知らなかった。唯私のⅠ，Ⅱ，Ⅲ型決定は，昭和40（1965）年から私独自が何らの先入意識なしに行って来たのであった。この経過は再三申し上げるが，「野鳥」235号（1966）「しまね野鳥」№7（1970）等によって御賢察いただきたい。

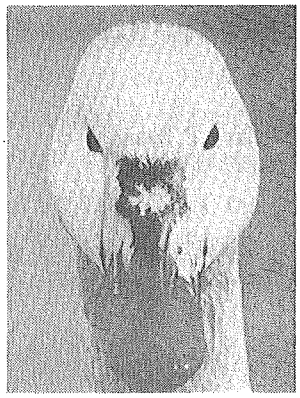
唯，私はその正面像ばかりでなく，側面像特に裏面像に精力的に取り組んだ。これは何等の成果も果さず，唯 Cy．Cy，Cy．Co の嘴峰表裏面の「黒色或いは黒点斑」は極めて不安定であるという事に気づいた位である。

さて，今の日本，世界中の白鳥観察者には，いかなる遠距離からでも Cy．Cy，Cy．Co の区別は日常茶飯事となり，人によってはその啼声～シルエットによっても識別出来るようになっている。（特に私の畏敬する内田康夫氏は，昭和37（1962）年既にその嘴峰のシルエットから Cy．Co を区別されていた。驚くべきことである。）私が，遠目で Cy．Cy の嘴はやや尖鋭で，Cy．Co のそれはやや鈍短を知ったのは，昭和45（1970）年頃からであった。

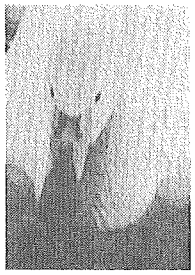
本　　論（Ⅲ）

① Cy．Cy の正面像に於て，そこには黒色部から頭頂に伸びるＹ印。或いは上から下に向う日本字の「八」の型（写真⑯'）或いは福島の八木博氏の申される三上：Ⅲ型（M．Evans：Pennyface）の如く菱形（ダイヤモンド型）を持つもの，サイコロの目の様なもの，種々雑多があるが，それらの嘴峰の裏は写真③の如く，全黄で鼻孔が黒色部と黄色部に跨っていることで，Cy．Cy と判定される。私も，その典型的一例を所持している。（写真⑯，尚これ等の詳細については「野鳥」235号を参照されたい。）

写真⑮　左マッシューズ氏　中央M. E. Evans氏　右筆者
（昭和55年２月　於札幌）



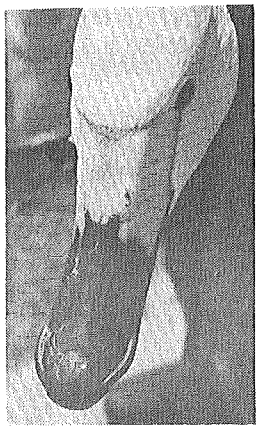
写真⑯
三上：Ⅲ型（M. E. Evans：Pennyfaceに以たCy. Cy）



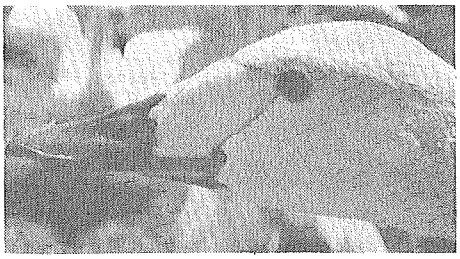
写真⑯'
八字型
Cy. Cy

②啼鳴その声による Cy. Cy と Cy. Co の識別も，今では会員殆んどの人が可能と思うが，数百，数千の場合は困難である。私も昭和30年から略15年，県の委嘱で裏の水漕付きの禽舎に延べ数十羽の傷Cy. Cy羽及び７羽の Cy. Co を収容したが，その際の両者の啼鳴の差は禽舎では分ったものの野外の，しかも混在となると仲々困難であった。（因みにかつて三沢米兵が尾鮫沼にて白鳥を射殺した陳謝として，米国の父親から日本に送られて来た２羽のコブハクチョウも私が県委嘱で一時収容したが，此の２羽は全くの啞に非ず，ウーウーと鳴くことを知った。蓋し，Mute とは Cy. Cy，Cy. Co の如く啼かぬの意をこめたものであろうか。

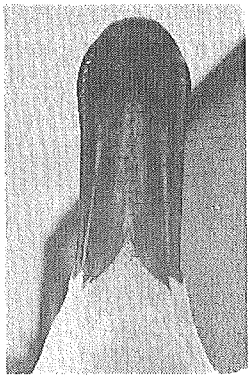
③嘴峰正面像に於て，特にⅡ型（Yellowneb）に於て，その黄色部の黒色の極めて不安定なことは既に述べたが，私は昭和53（1978）年５月24日小湊に於て，右羽骨折のⅡ型と覚しき一体が収容されているのを撮影（写真⑰，⑱，⑲），同年９月10日，自宅に収容（県委嘱）之の正面，裏面を撮影している。（写真⑳，㉑）その后，同10月18日，１ヶ月后にも裏面も撮影，殆んど変らぬ像を得ているが（写真㉒，㉓，㉔）之は初めⅡ型（Yellowneb）なるものが次第に黒点を増し，将来Ⅲ型（Pennyface）か，Ⅰ型（Darky）に変るのではないかの疑いさえ抱かせた。（特に写真㉔，裏面像）此の例を私は昭和55年札幌に於いてM. E. Evans 氏におみせした所，氏はこれが同じ鳥（Same　bird）かと驚ろかれた様子であった。黒点不安定の好例として示した。



写真⑰　小湊

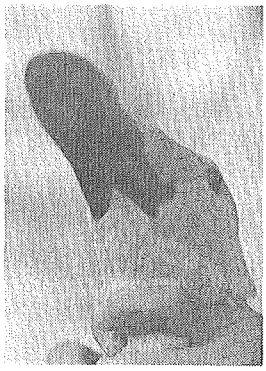


写真⑱　小湊

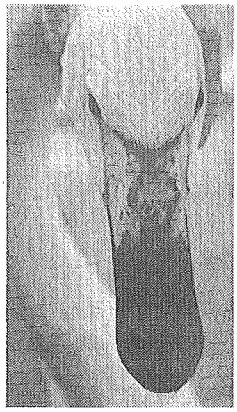


写真⑲　小湊

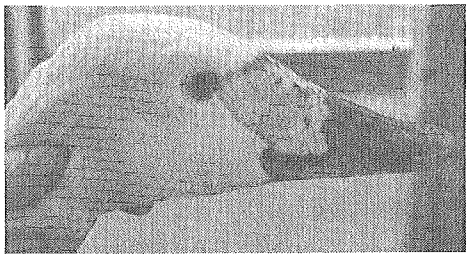
写真⑳　むつ



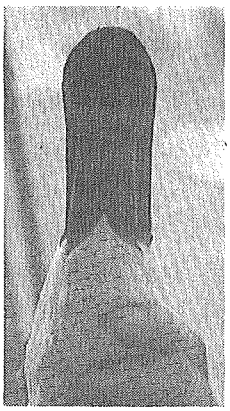
写真㉑　むつ



写真㉒　むつ



写真㉓　むつ



写真㉔　むつ

此の個体は９月のものと，その１ヶ月後の10月のものとでは，殆んど変らぬが，後者に於てやや黒点の増加が認められる。（此の個体等３体Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ型は，その後小湊に新設の白鳥収容所に移送され，全羽死亡，嘴峰追求が不可能であった。尚，此の嘴峰の変化を示した個体は，右羽脱落，歩行に支障あり，右羽根部に於て私共が切断を行った。しかし，切断後も極めて元気であった。）

④渡来初期の Cy. Co の幼鳥に於ての嘴峰は，写真㉕，㉖，㉗の如く嘴尖のみ黒色（正面，裏面）で

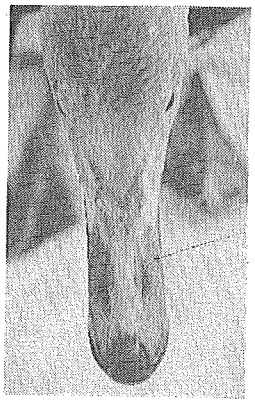


写真　㉕

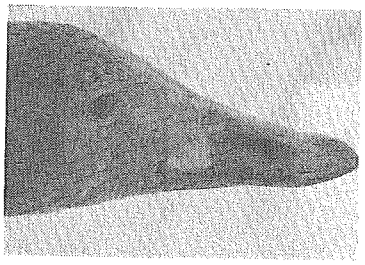
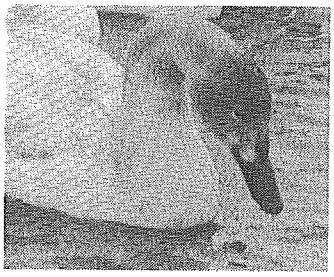


写真　㉖

写真　㉗

将来，黒化する部分は肉色で示され，Ⅰ型及びⅢ型への移行も既にやや判然と示している。

尚，筆者が既に「野鳥」235号等に記した如く，その黒色形成が嘴尖より頭部に向うもの，頭部より嘴尖に向うものが共に融合すると思われるが，写真㉘の如く渡来初期に於て，正・裏面共黒化の略完成している様な個体もある事は興味をひく。



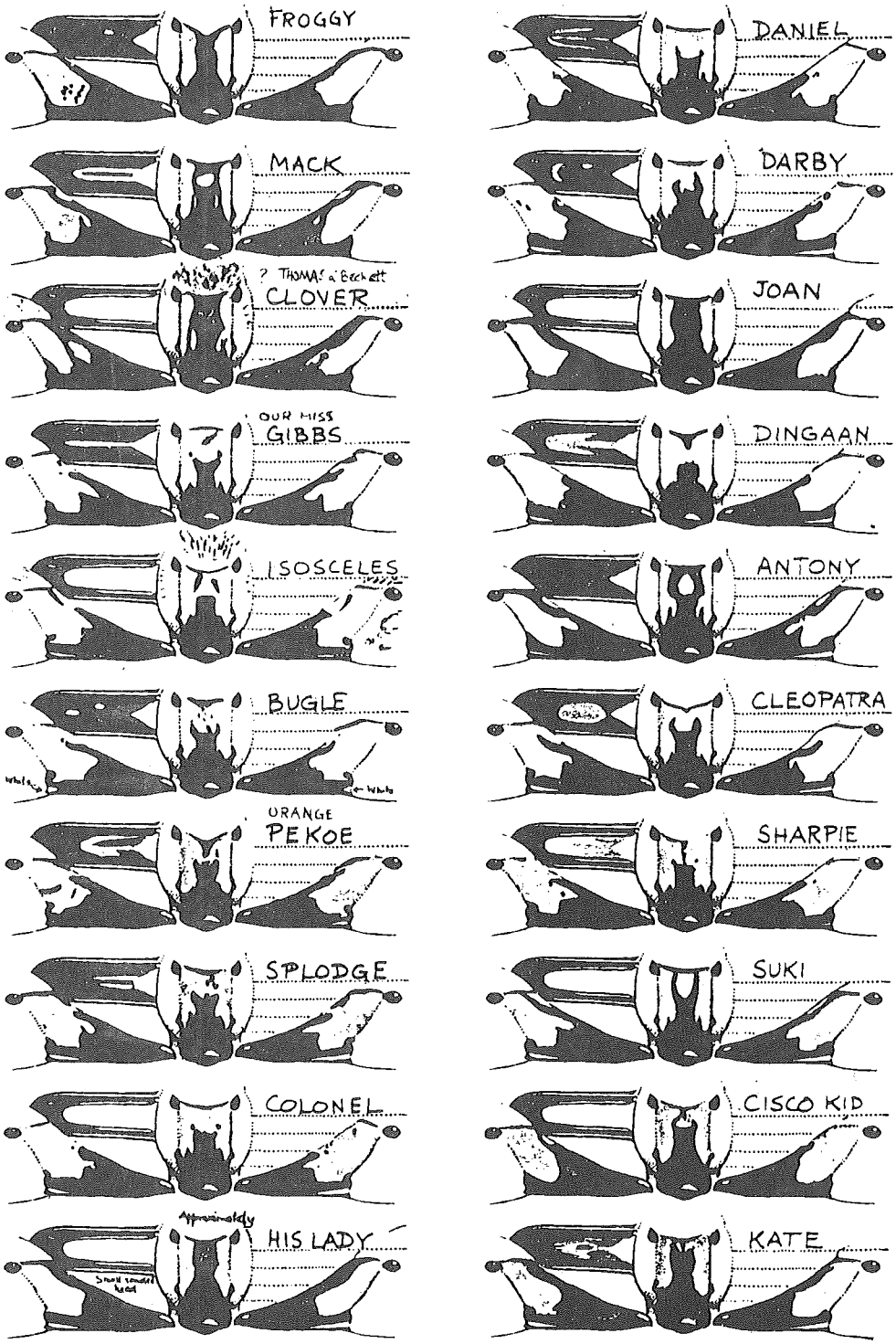
写真㉘（1988. 2. 2 於 北上川）

④次の図②は，Peter Scottの“The wild swans at Slimbridge”に掲載されたものであるが，これは全 Cy. Co の嘴峰の正面，両側面，裏面像を個体別に記した全く妥当，適確なものと思う。それ程各個体の嘴峰像型は種々雑多であり，これを一定の機序（Ordnung）の中に欺め込むのは不当と思うが，少なくとも三上Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ型，Mary E. Evans Darky，Yellowneb，Pennyface が，その基本をなすであろう事は疑うべくもあるまい。

即ち筆者は，此の三者の三様の組合わせによる雑種，或いはそのF_1，F_2 及びF_∞の種々なる嘴峰の混成が図②を作り出した原因と考える。此の３基本型の組合わせの展開をこそ，M. E. Evans氏が札幌に於て“I don't know”と筆者に答えられた所似と思っている。

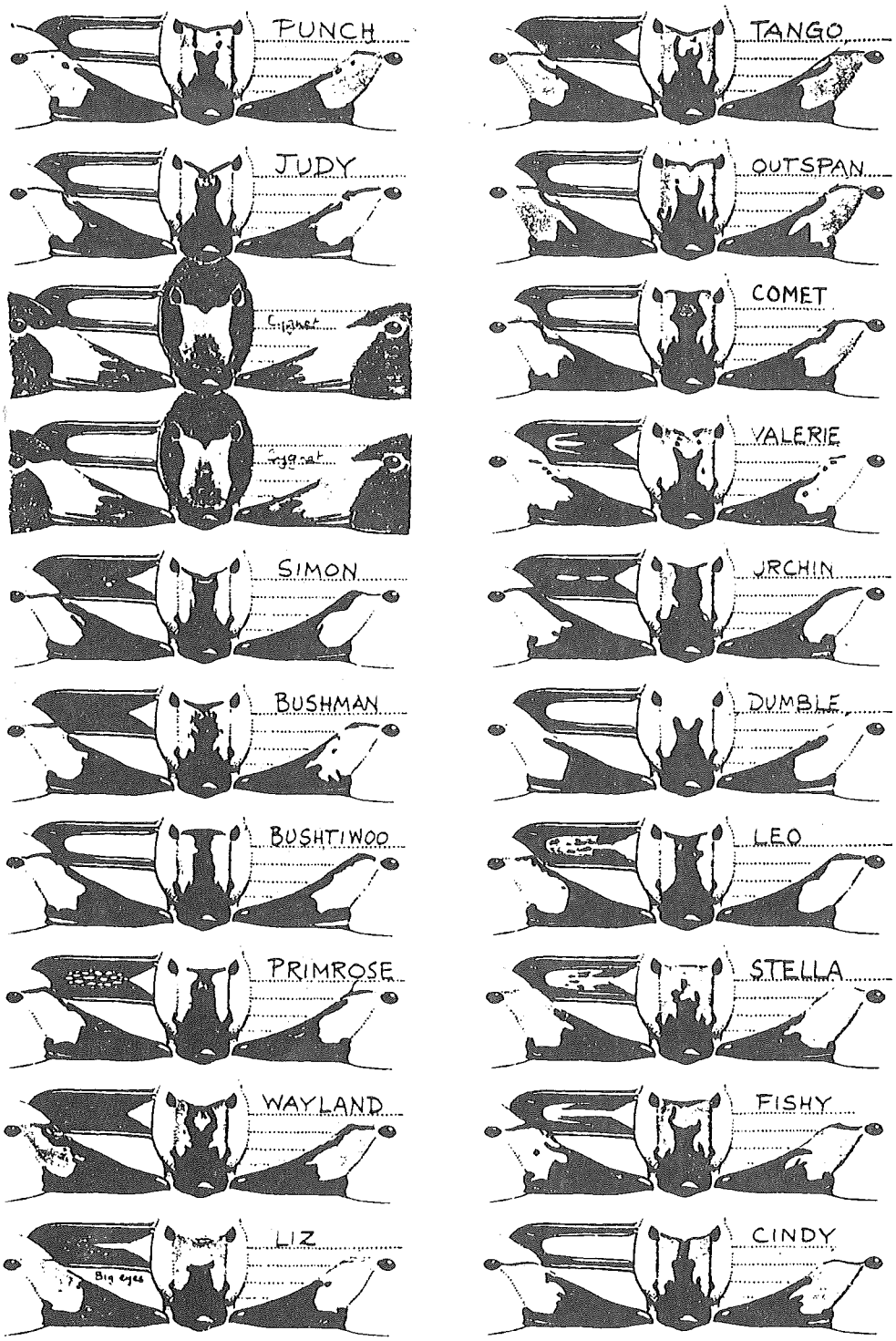
結　　語

以上，Cy. Co の嘴峰について述べて来たが，これで総べてが尽せる訳でもなく，尚私ももっと記さねばならぬものも多々持っているが，一応今回は玆で筆をとどめておく。



Pages from the identification book. By the spring of 1970 after 7 winters of the study 1073 Bewick's Swans had been named and drawn in front and side views for the ar: ual

図 ②



identification books. To save time the drawings are no longer coloured. Given a good view of a swan, any observant person should be able to find its name from the book.

図 ②

尚，先述した通り，Whistling Swan（アメコ）（頬に黄斑のあるもの，無いものを含む）と Cy.Co 3基本型の混血が過去岩手に於いて1例，福島に於いて2例，青森に於いて1例と発見されている以上，その交雑の子孫の嘴峰の形は雑多となり，既述の通り混迷が深まり将来全く収拾のつかなくなる様な事態の発生が予想される。

筆者は，最後に本会の会員諸氏及びあらゆる白鳥愛好者が，この Cy. Co の嘴峰に目を向けられ，傷鳥収容等あらゆる機会に於て，その嘴峰の正面像，両側面像（この両側は極めて重大で，W. Sに於いても両側の黄斑形の異るものもあり，全くこれを欠くもの，或いは北上市に於けるが如く左側にのみ数條の色彩の或るもの，及び Cy.Co の両側型に於いても，それぞれ異るものがあるのは，屢々観察される）及び裏面像を撮影保存さるべきものと思う。

此の意味で，図②は極めて科学的であり懇切丁寧と言うべきであろう。

Ⓐ 私の識別法の僅かな価値

さて私が初めて気付き，それが総べての場合に適合するものではなかったにも拘らず ― しかも当時，前記堀内氏（柳沢）によってその適中率は約40%位しかないと言われていたにも拘らず ― 私が今日尚その価値を失なわないとする点について触れておこう。（実に此の40%のパーセント数としては最も正確であろう）

私のこの早とちりが，松江穴道湖で意外な結果を斉したことは既述したが，今日，TVとか映画とかの画像に大群の白鳥像が現れ，それが，瞬時にして消え去る様な場合，果してそれが Cy. Cy か Cy. Co かを判定するのに此のI型は最も重大であろう。これは野外大群の場合の判定に於いても同様だが，此のI型を発見すれば，「あゝここには Cy. Co がいる!!」という目安はつく。これは正面像に於いて此のI型は極めてその判定が容易であり，これによってそこにはII型，III型，Cy. Co の存在を示唆してくれる。玆に於いてTV，映画に於いては，その供給会社を通じ或いは野外に於いては，プロミナーで詳しく1個体1個体に当れば，その全貌は明らかになる。

私は自分の事を言うのもおこがましいが，今迄これによってその大略の判定に満足している。会員諸氏の大群写真等の場合にもこれを追試される様切望する。願わくば，是非この私法を追われ，その持つ僅かなる価値を見出して載きたい。

Ⓑ 会員諸氏へのお願い

今迄私は，オオハクチョウをその原名から Cy. Cy，コハクチョウを Cy. Co として記して来たが，此の略号は，私の周辺及び鳥信交信の幾多の方々から既に御使用載いているが，誠に僭越ながら本会全員の方々の間に，今後此の採用をお願いし，会の統一記号として御使用いただきたいと念ずる。

即ちコハクチョウ100羽の中，幼鳥10羽の場合は Cy. Co 100(10) とし，オオハクの場合は Cy.Cy 100(10) と表示し，その簡略を計って載きたい。而して，成幼の判定不能の場合は従来の玉田誠氏等の常用される記号によるU. K（ unknown 或いは総数不明のときは（100±））即ち100（U. K）等を御使用いただきたいと思う。

会員諸氏の御理解と御採用をお願いしたい。私はこれが本会の定点観測報告等に非常に役立つであろう事を確信している。

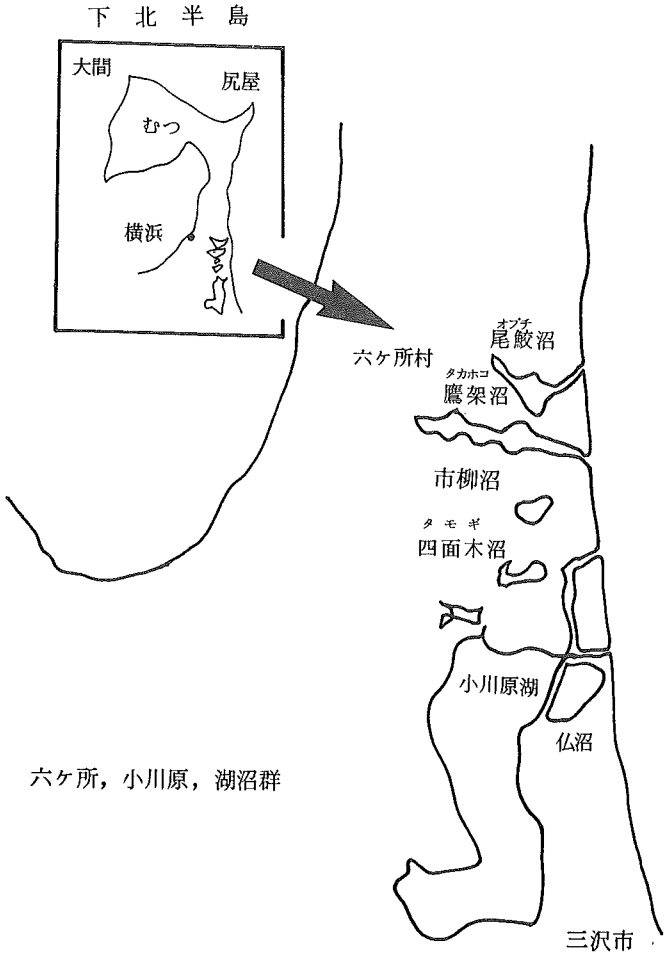
尚，拙稿脱稿後，新潟の会員本間隆平氏から該地弊死の７個体（Cy. Co）の正側裏三枚の写真計21枚を載いた。これは誠に貴重なもので，得難いものであるがこれは本冬３月，福島市の八木博氏から御恵与をうけた多数のCy. Co の嘴峰裏面の貴重な野外写真と共に，捨て難いものであるが，今回は紙面の都合で割愛し，私の所蔵する多くの残余の画と共に後日を期したい。

いづれにしても本間氏からのものは，嘴裏面の種々相をお示しいただいた点で有難く，又，八木氏からのものは野外に於いて，白鳥嘴の裏面をうつすシャッターチャンスは，意外に多い事を示唆して下さっている。

以上，雑然と記したが，これを以って松井会長からの御要請の一部の回答として，ひとまず筆を擱く事にする。（1988. 5. 10　Birddayに当り）

（追　　記）

当青森県には図③の如き，いわゆる「六ヶ所湖沼群」があり，多数の Cy. Co が飛来するが，私がここをよく知ったのは1971年頃からで，その後此処を専ら Cy. Co の観察所として来た。従って「野鳥」235号冒頭の地図には，これ等の湖沼群の名を記入すべきであった。謹しんで陳謝申し上げる。



六ヶ所，小川原，湖沼群

図　3